

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京3-128022
印刷／(株)ドモン企画

秋



愛と義 ローマの信徒への手紙

理事長 福島 勲

前々号で、石油戦争が宗教戦争の様相を呈してくる。名状し難いこの現実、速やかな停戦平和を祈ると、書いてペンを置いた。

世界の潮流が早いので、もう旧聞に属するかのようなだが、戦いは一方的で平和が戻って幸いだった。

他国籍軍の主役米国が、唯一絶対の神の名において、自らも正当化し兵士らの加護を祈っているに對し、イラクも唯一の神アラールのジハード（聖戦）と主張していたことについて考えさせられた。

人間関係で一番困るのは、お互いに正義を主張し、行為を正当化し妥協を許さず譲歩はしないで争うことである。

どちらかが倒れるまで、あるいは滅びるまで収拾がつかないことである。知恵者ソロモン王や大岡越前のような名裁判が、常に行われるとは限らない。

国と国との争いになつては裁判役が弱体で、大国の思うままになつてしまう感がある。

唯一絶対神を持ち出して、この世のことに多く策動すると、極力的な統制力が高まってくる。

京都大学の河合隼雄教授が朝日新聞に書いていたが、湾岸戦争で政治的理由の外に、その背景には宗教的問題があることを指摘して、多神論的思考方法を説いていた。

ユングを引用し、デヴィット・ミラの新しい多神論が紹介されていた。

唯一の神を信じる者が、多神論に目を向けるなどすると、敬虔な人のお叱りを受けるかも知れないが、「自由な民主主義の中には潜在的な多神論がある。」といった言葉に惹かれる。

全世界の人々が共存し協力していかなければならないことは、この唯一神への信仰であるが権力集中の絶対主義に陥ることの危険である。

しかし、言うまでもなく下手

共生・共有

施設長 今関 公雄

をみると、多神論や汎神論的なゆがみに堕すること、要注意である。

ここでもう一度、唯一絶対神を主張する自らの態度を反省してみなければならぬ。

第一に神は絶対でも我々は絶対ではないことは自明のことである。ドイツ語にフオアレツテ (Vorfleite) という

字がある。辞書は最後から二番目の者であるが、最後が神とすれば、人はどのように優れていても、最後ではなくその一つ前の存在である。

第二のことは、正義の主張の背後に常に愛ということ忘れてはならないことである。

義は正しさと愛に裏打ちされてこそ義である。正しさだけを主張する神の義はないのである。神が義を主張されるとき、人が今までに犯した罪を忍耐をもつて見逃しておられた (ロマ・三、二十五) とあるが、この見逃すという字に含まれる限りない神の愛と、そして自ら義を主張して十字架にかかられた、キリストの愛をじっくり見つめねばならない。

先号の養護施設でのS子集団暴行死亡事件の背景で、忘れられない問題点があります。それは、差別的、偏見の根深さであります。

乙施設には、S子が入所してきた時点で、既に四十名の先輩入所児がいました。それもかなり長期間にわたる在所児であり、そのほとんどが兄弟関係で固まっていた。

七才女児のS子が、三月に入所し、八月に死亡していますが、この四・五月間の子どもたちの精神風土を推察する時、差別と偏見の問題に思い至るのです。確かに眼に見え争いの種は、S子が先輩女児に対し、悪口を言い、それへの報復行為としての悪戯や虐めが集団化、暴力化へとエスカレートしたのでした。リンチ殺人のような残虐行為にいたらなかったものの正体は何か。私は今、これらの根元を差別・偏見の心から考え始めています。端的には、新入りの幼

児ごときに生意気な悪口を言われる筋合いはない、との思いであります。まして、自分たちはこの施設で長く暮らしている先輩であり、新入りは温和しくしていればいいのだ、との感情が働いたに違いありません。

S子の側では一層孤立感を強め、恐らく悪口を言う事で自己主張と自己防衛を図り、加害児たちはS子をスケープゴートに仕立てていったと思われます。差別とは、対外者や新入者などをひたすら異質なものととして扱い侮辱や隔離を行い、偏見もまた、不確かな想像や証拠に基づき先入観的な判断を加えて嫌悪や敵意ある態度をとっていく。

新入所児のS子をめぐると、私たちの心の風景を思う時、以上の疑念が強く湧いてきます。入所してきた不安な幼い友を、仲間の一員としてもつと暖かく受け入れる心の豊かさが欲しかったと切に思います。「愛されただけしか愛し得ない人間の存

在」の厳しい貧しさを知らされず。

施設を開設し五年以上経て、光の子どもの家の中学生女子に友人から悪質な手紙がきました。全体的に差別と偏見に満ちたもので、公開を憚りますが、大意は施設児は社会的負担を掛けており、しかも目障りなので、町から出て行けというものでした。手紙の中学生の背後に、親などの大人の生活や意識に差別、偏見が見え隠れます。この地域の施設児受容の道遠しを知らされました。

気の毒な家庭事情や困難な成育条件への共感が欠落し、自分も施設利用者になる可能性を持つ認識不足が原因であります。何よりも「共生・共有」の精神風土の貧しさを痛感します。養護施設光の子どもの家の運営理念は、無差別平等に誰もがかけがえない貴い価値を与えられているという、「神の家族」(エペソ二章)におき、地縁・血縁を超えた人間関係の創造を願っています。地域社会にもこのことが伝わり理解されていく事を願うものです。

再会

エッセイ

中島 陸雄 (県立高校教諭)

お寺に用事があって、方丈様と話をしている時、ふと思いついたように「先日、東京のTさんという女の方がおいでになりましたね、あなたの名前を覚えていましたよ。」と仰言った。私の書いた小さな油絵が一枚お寺に行っているの、それがきっかけで私の名前が出たらしいのである。「あ、その人、私の小学生の時の同級生だわ。」とTさんが言ったというのである。Tさんは旧姓Yさんである。

は、一部が焼け焦げていた。父親は戦艦、子どもは鉄兜をかぶっていた。そしてその子が、また、村の小学校に入ってくるという状況であった。疎開してくる人たちを受け入れるこちらの村では、直接戦場にはならなかったものの、戦争の不安と恐怖は、子どもたちの心を覆っていた。それと同時に、新しく入ってくる大勢の都会人たちに對して、極めて排他的であったのではなかったかと思う。大人も子どもも、そのような要素を強く持つていたようである。また別な見方をすれば、私たちの村が初めて異文化とも言えるようなものに接して、いわばカルチャーショックだったのであろう。村中の誰もが皆知り合いで、そこに住む人たちが生活し易い様に、様々なしきたりが存在し、それをお互いが何となく了解し合っているような世界に、突然都会の人たちの文化が流れ込んだ訳である。したがって、言葉

違いの違い、服装や行動様式などの違いなどが、次第にはつきりしてきたのではなからうか。だから、都会では当然と思われる人間関係の仕組みも、田舎の村では通用しない場合もあったであろう。そこで、この二つの異なった文化は、一方では融合が進みながら、一方では摩擦が起こっていた。しかも多数派である村の子どもたちは、少数派の都会からの疎開の子どもたちをいじめるという結果になったのではないかと思われる。

いじめの側の意識はどうであれ、いじめられた小学生のYさんにとっては、耐え難い事も多かったと思われる。まして両親から離れての疎開生活である。従って、お寺の方丈様の所で私の絵と出会ったYさんが、私を、友だちを、あるいは私たちの小学校を、当時のあの村そのものを、今どのようにその心のうちに残しているか、心配であった。あの頃の事が、彼女の心の奥に癒し難い傷となつてうずいていくという事はないだろうか。

まなざし……

佐藤家

暑くて長い夏休みでした。佐藤家の子どもたちはみんながこの夏休みになにか家族と関わる事が出来ました。鷹文君にとっても素敵な夏休みになりました。久しぶりにお父さんと新しいお母さんとその赤ちゃんも・鷹文の小さな弟ですが・が朝早くに迎えに来てくれて、一日茨城の海を楽しみ、夜遅くまで一緒に過ごしてきました。

今年はどうなるのかと心配した八ヶ岳登山も、多くの人たちのお力で見事、最高峰の赤岳を、最も困難なルートで極めて来ました。お盆の帰省は出来ませんでした、みなさんのご協力、仲良しの嬉君などと一緒に湯河原の海を満喫しました。

鷹文君の日は、チャンバラ遊びが大好きで、腰には大小だけでは足りなくて三本も刀をたばさんで走り回っています。マンガのドラゴンボールも大好きでTVで見て、本も買って読みます。そう、本読みは毎晩寝る前の二〇分間、一ヶ月続くと図書券のご褒美の約束で、自分で読むことをしています。二〇分を終わると「続きを読んで」とねだり、読んであげるとすぐ眠りに落ちてしまいます。

私の休日に、月に一度の鷹文君とデートは、映画が大好きで、「今度いつ行くの？」と催促されたり、見てきた映画の粗筋を誰彼となく話をしてやり楽しそうです。

この間は新宿で、セールスマン風の人につかまり困ったような顔の人を見かけ、「もし照子さんに声をかけてきたら、オレ、パンチだから」と、エスコートしてくれまします。しかし、通り過ぎて「アーよかった、オレドキドキしちゃったよ」と手をつないできました。私を超える力はあるすぐ彼のものになります。その時に、本当の意味で強い男の子になれるように・。優しい鷹文君が克服しなければならぬ課題を、励ましていきます。もう、子どもたちとの暮らしは秋の色を深めています。石毛照子

原田家日記

夏休みも、日本人の心情や情緒に大きな影響を持つお盆の頃になると、子どもたちの表情や生活のしぐさなどに、はつきりした二つの色をみる。親や家族などの家に帰省してお泊まりできる子と、そうでない子と・。そして、私たちは、帰省など出来ない子どもたちの、この期間のプログラムに腐心するのだ。

今年の原田家は、高雄、一志、環と、左姉妹、山口兄弟の七名が残った。子どもたちの都合で残った訳ではないので、帰省した者に釣り合うような企画でなければならぬ。

今回は、海に行きたいという願いが、湯河原の城山学園のご好意で、セミナーハウスに佐藤家と一緒に泊まりを受け実現した。

第一日の夕食時、突然停電になるというアクシデントもあったが、何と、高雄は真つ暗になっても黙々と食べ続けるのだった。

散歩に出かけて猿に会い、仲間だ、と喜んでいた亜季羅。

二日目はいよいよ海だ。真鶴の三石海岸での磯遊び。遊んでいるうちに足がつかなくなつて慌てていると、目の前を流されていく多歌音。あつた岸が遠くなる。二人とも声も出ない。あつ、もう一人、信恵さんも沖へ沖へと流される。私たちは何もできない。もうダメか・。数分後、田中先生に助けて頂いたが、何時間も流されたように、今でも怖々になります。田中先生に沖まで連れてもらい喜んで高雄君とのこの違い。海には入らずにただひひ言っていた一志。カニとりをして逃げられた福子と啓二。たつぷり一日、潮の香を吸い、湘南の風に戯れ、遠慮がちに日射しに歓声をあげて。背を箱根外輪山に囲まれ、海を望む素晴らしいロケーションの中で、美しい思い出をつくれた楽しい三日間だった。

帰省できなかった無念さや、揺れる思いは、完全には解消できません。でも、心を配って下さった城山学園の方々の思いや、足りなかったら私たちの祈りは、きつとー。ありがとうー 池田祐子

子どもたちの季節

仙道家

子どもたちの一番大切な八月が、学校から家に戻ってきた夏休み。例年通り、小学生以上は十名前後の横割りグループで登山をしました。それは、こころ一番という時にもう一頑張り出来る力と、仲間意識を育てることが目的です。

一年生の悠子と沙恵は、奥秩父の古い民家の民宿のご好意もあって一泊し、霧凇ヶ峰に登りました。悠子は泣き、沙恵は無言で耐えて、初めての山登りを完了しました。

二年生の亜季と三年生の萌季、維沙武は、北八ヶ岳の横岳へ。二千五百mの山に登る辛さを耐えて、仲間に迷惑をかけず、むしろ助けになることの大変さを文字通り体で体験しました。

四年生の寛と五年生の加津子と嬉は、八ヶ岳の最高峰赤岳へ、最難度ルートで挑戦。寛と加津子は、鎖場の手前で断念しましたが、嬉は頑張り、一番乗り。登山を始めたグループだけあって「〇〇ちゃん頑張り」などと励まし合い、固い仲間意識を感じました。

中三の匠と特別参加の嬉は、横岳から赤岳を往復するという超難度コース。匠は仲間を励まし、嬉は中学生に混じって大奮闘。費用の関係で麓町から日帰りです。今回は様々な要因が重なり下山が遅れ、車に到着した頃は、真つ暗闇が全てを覆い尽くしていました。

大人も子どもも体力を限界ギリギリまで使い果たしました。それでも、子どもたちの快復力はすさまじく、食事の準備、後かたづけも「僕たちがやるよ」と引き受けてくれました。

匠は来春高校を受験します。この経験で培われた頑張り、その日に生かされるよう祈る思いの日々です。

様々な行事などで、彼らが確実に成長しているのが見えてきます。それは彼らの努力や力もさることながら、真つ直ぐ伸びてくれるように・。そんな思いでお支え下さったたくさんの方々のお力があればこそ！心から感謝致します。 岩崎まり子

虹の会の夏

夏休みのずーっと前から、小学二・三年生のみなが、園庭の草取りと、食堂のワックス掛けを頑張りました！それは、ご褒美に、夏休みに入ヶ岳へ連れて行ってもらえるようにと、頑張りたのです。

夏休みの前、初めての本格的な山、北八ヶ岳の横岳に決定です。ところが、これまで使わせていただいた家が全部ダメになり、心配していたら、本紙の素敵なエッセイの中島先生のご紹介で、画家の谷本清光先生の小海の山荘をお借りできることになりました。

台風の接近で、天候が最初から心配でしたが、谷本先生の大歓迎を受けて、素敵な絵が壁を囲む山荘の夢の一夜を過ごしました。

翌日、麦草峠を車で越え、リフトでの山腹までは悠々でした。さあ、山頂めざしてアタックです。怒られ始めは亜季。あちこちによろめいては転びます。「そうでなく！大股で！」鬼の音が、コッとして得させます。最後は山歩き先生と言われ、大得意です。

去年の夏の物語山では私の腕から手を離さず、山中に響きわたる大声で泣き通した多歌音は、足の運び方などを菅原先生に何回も教わりながら、黙々と登っていきます。亜季も多歌音も、田中先生も皆も、疲れと満足の顔で、二千五百mの山頂のお弁当を食べました。

たった一年で、こんなに成長する子どもたちです。虹の会の定番コースの温泉で汗を流して、山荘に帰る途中に大雨になって、夕食のバーベキューは、どうしようか！

帰りつくと、何と！谷本先生が、庭に急ごしらえの屋根をかけ、バーベキューの準備をして待っていて下さいました。始める頃には雨も止み、ちよつと得意の「大きな歌」の合唱を谷本先生にプレゼントしたり・。山の写生、スグリの実を採ってジャム作り、白菜やレタスの収穫、星や人工衛星の観測も！楽しい経験をたくさん！の三日間。ご用意下さった谷本先生、中島先生、そして皆さんに感謝！ 竹下由香

育ちゆく子らと 八

秋本 光代

長い夏休みの中で、子どもたちが一番心待ちにしているのが、年齢別に構成されたグループで行う登山です。今年初めて登山を経験した夢の会の一年生グループ4名。谷本先生のアトリエで印象深い素晴らしい経験と登山ができた虹の会。鎖場に挑戦した健脚揃いのGOGO会。

殿は、高校受験生を抱えた八八会、小学六年生から中学三年までの六人です。年齢の幅が広く、体力の著しい違いなど、一緒に何かをするには一番難しいグループです。

今年は全員で八ヶ岳の赤岳山頂にたどりつくことを目指して、受験勉強を先にはかどらせて、八月二七日に出発しました。飛び入りで、小学五年の嬉君も参加したことで、八八会最年少だった六年生の光子が、どこまで頑張れるか、期待と不安を感じていました。

光子は、本を読むことがとても大好きな、知的好奇心の強い

女の子です。大人でもギブアップしそうな厚い本でも、どんな読みます。そして、思ったこと、感じたこと、考えたことを文章に書くことが上手です。

反面、運動や細かい作業をするのは大の苦手。夏休みの体力づくりの長距離走は、見ていてさえも気の毒に思えてくるほど辛そうでした。

光子は、去年、この同じ山の同じルートを途中で断念して引き返したのです。去年は初めての登山で、辛くて辛くて、叱られたり励まされたりしながら登ったのですが、天候が不安だったもので、途中から何人かと下山したことでした。

その苦しさを思い出していたのでしよう、登り始めは不安そうでした。先頭の睦男が「光子、頑張れ、大丈夫か」後ろから悟が「光子がついて行けない、もつとゆつくり」と先頭の匠に指示をします。

「そういえば、去年引き返し

たのはこの辺だったっけな」睦男が言います。去年の地点を通過した光子への確認と激励です。光子も、逸郎も去年の地点をはるかに過ぎて登ります。

弱音が出そうになりながらも光子は頑張りました。もうだめかな、これまでかな、と思わせながら進んで、昼食を取った後は、もう、励まされながらも、ブレーキにはならなくなつて、登れるようになってきました。

決して悠々とではありませんが、とうとう、本当に二千七百mの横岳の頂上に着いたではあります。去年断念した頂上へ光子が来たことは、みんな驚き喜びました。一番驚いたのは誰よりも光子だったでしょう。

それから、赤岳へ向かう頃には、崖が険しく「怖いよ、こわいよ」と言いながらも、登り始めとは表情や足の踏み方まで違っています。

下山も登りとは違った恐怖心があつて、足が竦んでしまします。本当にこんな所を登ったのかと疑いたくなるほどです。「怖いー」「降りなきて帰れないよ、頑張つて、しつかり」自

分に言っているのか、光子に言っているのか半々に励まししながら、一步一步確かめるように下りました。

手を取ってやりながら、もし光子の全体重がかかったら、私はどうして支えられない、と不安に体が固くなつたりもしました。

すっかり暗くなった山荘にたどりついて、夕食の支度をする頃は、私よりもちゃんと光子は働いています。

楽しく夕食を済ませて、後かたづけは明日でいいと言うのに、中二の兄と一緒、すっかりきれいにしてくれました。

こんなことはこれまでの生活で一度もありませんでした。

たった一度山に登ったことがこんな子どもを変えてしまうのかと眼を見張る思いでした。

そんなこんなをたくさんしながら、この夏、自分たちの限界をまた一つ拡大し、自信にしたことは、みんなの表情や全身で確認できました。

たくさんさんの困難や課題を抱えながら、光子は来年中学生になる準備を始めています。

関係 その一

菅原 哲男

養護施設光の子どもの家は、決して切れない人間関係であるはずの、家族関係からさえも切り離され、あつてもわずかしかり離れない子どもたちが、人と人との関係への信頼や愛などを充分に経験し、人を信頼し、愛することのできる人格を形成することを願って建てられた。

毎年夏を迎えるに当たって、子どもたちの心や体を養い、美しい想いや素晴らしい感動などを共感するための計画に、総力をあげて取り組んでいる。

ところが、今年は、計画に当り大きな困難を抱えた。

これまで、大きなご援助をいただいていたタカラクラブの会長の波沢多歌子先生が、先年不慮の事故で急逝され、後任の属千景さんなどの懸命の努力にも関わらずこの団体の解散という事態を迎えてしまった。

したがって、毎年大きな楽しみ、の拠点の一つだった軽井沢のゲストハウスを使わせていただ

き、軽井沢までの交通費や三泊四日間の生活費などの一切を提供して下さっていたのが全く消えてしまったのである。

もう一つ、五年の間、小学高学年のGOGO会や、中学生主体の八八会の八ヶ岳登山のベイスに提供して下さった、倉沢保母の父上の、佐久にあつた古い家屋の使用も事情で不能になつてしまったのである。

何しろ、夏の行事費総額が六〇万円である。引率の大人を入れて一人あたり一万円余りで、海にも、登山もしたい。その上、東大宮教会の教会学校の夏期学校は是非とも参加させたい。

しかし、この夏期学校だけでも小学生二名に職員四名の参加で四〇万円弱を消化する。

四つの横割りグループと三軒の家の行事のやりくりは...。この春から初夏にかけて、あらゆる知人友人、公、私的団体を片っ端から当たり、限りなく無料に近い宿泊場所を求めて、

信州や会津などを回り歩いたが、芳しい情報は得られなかった。

そんな五月の下旬、本紙に素敵なエッセイをお寄せの中島睦雄先生が、私たちをご自宅での夕食に招いて下さった。

その折りに何気なく、夏の登山のベイスキャンプを探していることともの話になった。

すると、先生は奥様に向かつて「おい、Tさんのアトリエはどうだろう。あそこなら大丈夫ではないかな」と、言い出した。

奥様は「Tさんの所だったら、きつと大丈夫でしょう」と、受け合つておられた。

そして、話は他に移り、確たるものにはならなかった。

その後、何事もなく過ぎた。YMCAの施設や青山学院の寮、あさひ福祉作業所などを、紹介されるままに尋ね回った。

とうとう、夏休みが近づいて、計画の実施のために施設の確保が急がれてきた。

教会学校については、教師会で、現地集合現地解散方式をとつて、ワゴン車を自分たちが運転し交通費を節約する方法なども提案したが、結局、遠隔地で

あることや、バスの車中も利用すると、入れられなかった。

子どもたちは、園庭の草取りや、ワックス掛けなどをし、夏休みの行事を楽しみにしていた。いよいよ七月も中旬になり、借金してでもどこか出来るだけ安いところを確保する事にした。そんな時に、中島先生から、友だちのアトリエの下見に行こう、とご連絡があつた。

早速、関わる職員二名と先生と私で、信州小海町を訪ねたのは七月十四日だった。

阿登倉山荘は、小海町を見下ろす東側の山腹にあり、使わなくなった農家を改造、改装し、て油絵を壁に掛けた、何とも贅沢なものだった。

生活や制作活動は東京を拠点にしておられる谷本先生は、私たちのために朝早く東京から車でおいでになり、到着した午後一時過ぎには、味噌汁やご飯を炊いて待っていて下さった。

中島先生と同じ大学の親友と紹介された谷本先生は、絵を描く事で通してこられたという。私は、それを聞いて少々不安になつていった。(この項続く)

日誌抄

五月一日
七月二十日

五月四日 第六回子ども祭。憲

法記念日や子どもの日は、日

本人にとつてとても大切な記

念の日。単なるレジャーに流

れないように、記念の行事を

つくつてきました。この意に

賛同して下さる飯田洋司さん、

久喜高校音楽部などのご出演

などのご協力をいただき、八

〇名余の子どもたちや家族や

関係者などが集まり、歌い、

演じて楽しい盛大な音楽祭を、

よく晴れたステキな一日。

六日 青山学院生二三名来訪し

て、土運びなどに汗を流し、

子どもたちと走り、遊んで、

交歓の日を。感謝。

十四日 児童福祉週間記念事業

第六回講演会。美深育成園の

木下茂幸先生が「自立・養

護施設の社会的役割と子ども

たちへの責任」と題して基調

講演、暁星学園の込山稔先生

と鳥取子ども学園の藤野興一

先生が「自立援助ホームから

養護施設が見える」をテーマ

に。熱く、厳しく、刺激的な

友愛溢れる一泊二日。県内施設の仲間延べ三十余名も参加。十七日 創立以来七年目がほと

んど職員の勤続疲労の色も

深まっている。激しい夏休み

のとりくみを前のめりになつ

て迎えるためにもじっくり充

電の連続十日の休暇を実施。

二十日 町内原道地区愛育会の方々、手作りのお料理を持参

して五月誕生会にご参加。

二十五日 第二七回理事会。九〇

年度事業・決算報告を承認。

二十七日 小中学校家庭訪問開始。

子どもたちの意外な一面も。

六月一日 栗原忠さんのお励まし、毎月初日の定番。感謝。

二日 東京の忠孝塾からお支

えが。ありがとうございます。

十五日 人形劇へN.T.T.のご招待。夢の世界の一日。感謝。

十七日 町内、稲葉さんより食品、加藤さんよりお花を。

十八日 江森ハヤサロンの散髪ご奉仕。みんなキレイに。

〇県指導監査実施。高いご評価。

二〇日 遠距離家庭訪問をより

よい夏休帰省実現に向け開始。

二十四日 この両日、三愛学園より一四名、県立衛生短大より

一六名が見学と交歓に。

七月七日 近県剣道大会。佐藤、

井出、黒川、安田、菅野、大

森らが参加して上位を占める。

十一日 栗橋のタカラブネ店主

榎本さんよりケーキを沢山。

十二日 近距離家庭訪問開始。

夏休みの帰省の調整、困難が

重なり、今年は・・・。

十四日 夏期行事八ヶ岳登山の

宿泊場所の下見に信州佐久町の

谷本画伯のアトリエ、あさ

ひ作業所へ。中島睦雄先生と

十五日 しずくの会、草取りポ

ランティアが今年も。感謝。

十七日 光の子どもたちの家の子ど

もを担当している所沢児童相

談所の福祉司二名来訪。子ども

の生活状況の情報交換、養

育、家族問題の検討などを、

担当保母や関係職員と協議。

二十日 元気に一学期を終了。

登山のベースの宿泊場所のメ

ドもつき、夏休みの目標を確

認するオーブンングフェステ

イバルを、篝火を焚き、中島

先生をお招きして。

☆ おかげさまで、こんな生活

が続いています。更によりよく

するために一励みます。(くら)

反射光

暮らしがすつかり晩秋の景色に包まれていきます

☆大変遅れてお届けすることを

お詫びします☆この夏休みに子

どもたちが獲得したエネルギー

の分を私たちが失ったものではな

いかと疑われる日が続きましたが

☆特集した訳ではないのですが

夏休みの報告が紙面の殆どを占

めました☆子どもたちにも私た

ちにも夏休みは大きな意味を持

っているようです☆課題ぎつし

りの学校から解放された彼らの

力は、八ヶ岳の最高峰赤岳と横

岳を日帰りで征服してしまいま

す☆ある部分では大人を抜いて

いる彼らが、コンスタントにそ

の力を発揮できるように援助す

るには、余りにも私たちの力量

の不足を、しばしば痛感させら

れます☆彼らの二名は考え抜い

て、将来を展望するにはそれ以

外ないことを痛切に確認し、来

春高校を受験します☆それへの

あらゆる条件整備も未完です☆

力足りないが、感謝溢れる彼ら

の現実の生活や未来を、確実に

する働きは何にも優先するもの

として、頑張ります。(なお)